

「くせに！」

園長 山中 文

子ども同士のけんかを見ていると、面白いことがあります。

ある時、年の離れた兄弟のけんかを見ておりました。小学生の兄が2歳の弟に向かって「弟のくせに！」と怒っていました。弟は負けじといい返したいのにどう返していいかわからず、しばらくもぞもぞしていたあとにようやく出てきた言葉は「くせに！」だけでした。同じように言い返したかったのでしょうかから、苦肉の策といったところでしょうか。気合は十分だったのですが。

またある時は、弟がおにぎりを掴んだまま兄に「ばっかりじゃないか！」と怒っていました。たぶん、兄の方から「食べてばっかりだな」とでも揶揄われたに違いありません。年の離れた兄の方は、「何を言ってるやら」と涼しい顔で相手にもしていませんでしたが、弟のおにぎりはしっかり離さないまま訳もなんとか言い返そうとしている様子は、可愛らしいやらおかしいやらでした。

きっと弟は、「くせに」とか「ばっかりだ」ということばが相手を揶揄したりする場合に使う言葉だとはわかっていて、同じような言い返しにチャレンジしたのです。しかし、如何せん、その上に何という言葉を当てはめればいいかまではまだ思いつかなかったのですね。

この弟の表現はまったくおかしな表現ながら、その表現から見事に言いたかったことや気持ちが伝わってきます。

大人は、このような子ども同士の会話からいわば語用論的推察を楽しむことができますが、子どもはどのようにして大人のことばをそのようには受け取ってくれません。

少し前に、子どもに遠足のお弁当に何を入れてほしいかと聞くと「納豆と汁！」と答えられてしまったと書いたことがあります。親の方が「卵焼き」とか「ウインナー」とか、お弁当の定番おかずを答えてくれるだろうと期待しているに対して、子どもはまったくそんなことには村度せず、ストレートに受け止めて普段食べている好きな物から答えていることがわかります。子どもが大人の言葉の裏を読み取ったりする方がむしろ問題であったりしますから、これはこれで子どもにとっては大正解の返答です。

このような子どもの言葉の世界になるほどと思わされたり、大人のステレオタイプな問いかけに対する子どもからの思わぬ切り返しに「やられた」と思わされたりすることはありませんか？子どもとの会話や子どもとの会話は、文脈理解の違いを楽しみながら、会話の成長を見守っていききたいですね。

